『スラヴ文化研究』Vol.17 (2019) pp.1-19

ドストエフスキーと漱石における近代文明批判
―『白痴』と『こころ』を中心に―

チャラコヴァ・マリア

《要旨》

本論文は、ドストエフスキー（1821～1881 年）の『白痴』と夏目漱石（1867～1916 年）の『こころ』に焦点を当て、そのなかの人間関係の歪みに現れている両作家の近代文明批判について考察しようとしたものである。

19 世紀半ば以降、ロシア、日本両国ともに、早急に西欧文明を導入し始め、近代化の道に邁進したが、外来の思想・文化との接触は様々な問題をも内包していた。そうした中で創作活動を行っていたドストエフスキーと漱石はそれぞれの国における慌ただしい近代化によってもたらされた社会変化を投影した数多くの作品を残した。

本論文では、『こころ』と、漱石が『こころ』を執筆後に読んだとされる『白痴』に注目し、両作品に共通してみられる、金銭に左右される人間関係や欲望によって引き起こされる一連の悲劇が漱石におけるドストエフスキーの影響というよりは、むしろ両作家の文明観・問題意識の共通性によるものであると論じた。

《キーワード》

近代文明批判、ドストエフスキー、夏目漱石

はじめに

19 世紀において、ロシアはアレクサンドル 2 世の大革命により、日本は明治維新・文明開化により大きな変化を迎える。ドストエフスキーと漱石は、両国が近代化していく時代における社会変化を反映した数多くの作品を残しており、なかでも、『白痴』と『こころ』はそうした作品の代表である。

『白痴』は 1868 年 1 月から 12 月にかけて『ロシア報知』に掲載された 4 編からなる長編小説であり、ドストエフスキーが理想とした「しんじつ美しい人間」キリスト[1]を体現したムイシキン公爵と彼が巻きこまれてしまう三ないし四角関係を主題としたものである。

[1] ドストエフスキー、米川正夫訳（1970）『ドストエーフスキイ全集 第 17 巻』河出書房新社、114 頁。

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス（CC-BY）下に提供します。
https:creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.jp

初期から晩年に至るまでドストエフスキー文学において重要なモチーフをなしていた憐憫・同情の問題が「キリスト教的なイデーにまで高められた」[2]のが『白痴』である。ドストエフスキーは 1867 年 2 月に 20 歳以上若い速記者アンナ・スニートキナとの再婚について、亡くなった妻の連れ子や自身の兄の遺族から強い反対を受け、さらに種々の債権者との軋轢もあり、『ロシア報知』の編集者カトコフに金銭の工面を頼んで同年 4 月に妻アンナ・スニートキナと一緒に外国への旅立ちを余儀なくされる。ドイツ、イタリア、フランス、スイスなど西ヨーロッパの主な都市を転々としながら『白痴』と『永遠の夫』のふたつの長編小説を執筆し、『悪霊』の創作ノートにとりかかる。それまでの作品と同じように、『白痴』においても、ドストエフスキーの「生きた、具体的な、歴史的にも正しい、社会の顔を描き出し、その社会の、特徴的な、精神的雰囲気を、再構成しよう[3]」とする強い願望が見られる。旅先でドストエフスキーは、ロシアに関する最新情報を把握すべく、図書館でロシアの新聞を読むことを日課としており、ドストエフスキー夫人の日記によれば、1876 年の冬、両親に虐待を受け、自殺未遂を繰り返したあげく、家も 4 回ほど放火しようとした 14 歳の少女、オリガ・ウメツカヤ（のちにナスターシャ・フィリッポヴナの人物像に生かされた）の裁判情報に特に注目していた。[4] 他にも、当時話題になっていた幾つかの殺人事件が『白痴』のなかに織り込まれている。[5]

他方、『こころ』は、大正 3（1914）年 4 月 20 日から 8 月 11 日にかけて東京と大阪の両朝日新聞に掲載された、3 篇からなる長編小説である。先生と K とお嬢さんの三角関係が展開していく中、「自由と独立と己れに充ちた現代」を生きる人間像とともに、孤独と寂寞をもたらす明治の精神への鋭い批判がみられる。よく知られているように、漱石は少年時代から中国古典・中国哲学に親しんでおり、学生時代に、第一篇「総論」、第二篇「老子の修身」、第三篇「老子の治民」、第四篇「老子の道」という 4 篇からなる「老子の哲学」（明治 25 年）という題で、東洋哲学論文も書いている。漱石は特別に『こころ』の単行本の装幀に力を入れて自らその表紙を担当した際に、漢字の字典『康熙字典』の「心」の字解をそのまま用い、冒頭に「心なる者は形の君にして、神明の主なり」[6]という『荀子』巻十互「解蔽篇」からの用例を掲げた。『こころ』における荀子の影響に関しては、たとえば江藤淳が、「漱石の『心』という小説は、［中略］荀子の人間観を念頭に置いて読んでいくと、あたかも厳密な方法を用いて荀子の定理の証明を試みている小説であるかのよう

---

[2] 木下豊房（1993）『近代日本文学とドストエフスキー――夢と自意識のドラマ』成文社、105 頁。
[3] エフ・イー・エヴニン［ほか］、植野修司訳（1967）『アカデミー版ドストイェーフスキー 人時代 作品 思想』雄渾社、267 頁。
[4] *Достоевская А.Г.* Дневник. М.: Рипол-Классик, 2017. С.107.
[5] *Мочульский К.В.* Достоевский. Жизнь и творчество. М.: Рипол Классик, 1980. С. 292-293.
[6] 藤井専英（1969）『新訳漢文大系 6 荀子 下』明治書院、633 頁。

な印象を抱かれます」[7]という見解を提示している。『白痴』も『こころ』もともに恋愛を軸にした小説ではあるが、完全なる恋愛小説とは言い難い。むしろ死や罪の暗闇に沈んでいくその愛によって、ドストエフスキーと漱石それぞれが見出した、近代の過渡期における人間関係の有り様がうかがえる作品であるといえる。

漱石が随筆「思ひ出す事など」（明治 43（1910）～明治 44（1911）年）において、「ツルゲニエフ以上の藝術家として、有力なる方面の尊敬を新たにしつつあるドストエフスキー」に言及していることや、大正 5（1915）年の日記において「Life 露西亜の小説を讀んで自分との同じ事が書いてあるのに驚く。さうして只クリチカルの瞬間にうまく逃れたと逃れないとの相違である。との筋」という謎めいた記述を残したことなどを手掛かりに、板垣直子や宮井一郎、桶谷秀明、清水孝純をはじめ、漱石におけるドストエフスキー受容を論じた研究者は数多く存在する。だが本稿では、漱石におけるドストエフスキーの影響というよりは、漱石とドストエフスキーにおける問題意識の共通性による『こころ』と『白痴』の内実の近似性について考察する。

1. ドストエフスキーと夏目漱石

漱石におけるドストエフスキーという人物とその小説に対する評価を考えるにあたって、ドストエフスキーを愛読し、漱石にドストエフスキーの小説を推奨し提供した門弟の森田草平の証言がしばしば持ち出される。森田によれば、森田が「『煤煙』を書いたずっと後」[明治 42 年 1 月 1 日から 5 月 16 日にかけて「朝日新聞」に連載:引用者注]のころ、漱石はガーネット夫人の英訳「『白痴』から始めて、三四冊讀破」した。そして最初に読んだ『白痴』に関して、「これは皆有り得べからざる程度に誇張したものだ、誇張以外の何物でもない」と断言し、さらに『白痴』に描かれる死刑の恐ろしさは、ドストエフスキーが実際に体験した「狂言処刑」を材料にしたものであり、その点においてドストエフスキーは「人生の眞實に觸れてゐるじゃありませんか」という森田の抗議に対して、漱石は「いや、そんな非常な事件を強烈な刺激乃至は激越する感情を取扱はなければ、人生に觸れないやうに云ふのは間違ひだ。平凡な日常生活の間にも深刻な人生はある」[8]と手厳しく反論したという。以上は森田が提示した漱石のドストエフスキー観であるが、ここで看過できないのは、それに続く森田の言葉である。

---

[7] 江藤淳（1978）「漱石と中国思想―『心』『道草』と荀子、老子」『新潮』第 75 巻 第 4 号、175 頁。

[8] 森田草平（1948）『夏目先生と私 下』東西出版社、123-124 頁。

帰って考へて見ても、先生の言葉には未だ私の納得し切れないものがあった。が、しばらくして又思ひ返した―「いや、先生は相手が俺だものだから、ドストエーフスキまで解らないやうな顔をして、わざとあんな事を云ってゐるんだ。例に依ってアンチテーゼだ、親爺逆を云ってゐるんだよ」と。そして、これは必ずしも私の想定が間違ってゐなかった。[9]

漱石の強烈な批判というのは、文学的な議論において必ずドストエフスキーのことを持ち出す自分の「行き過ぎを矯める」ために提出された、いわゆるアンチテーゼなのだ[10]という森田の解釈は見逃されがちであるが、森田も「先生のお宅に寄食して以来―尤も、前からさう思つてゐられたのでもあらうが―此奴にはもう一遍常識で鍛錬してやる必要があると云つたやうに、づけづけ云つて、何事にも常識を振回されるやうになつたことは事実である」[11]という風に自ら述懐していることや平塚らいてうとの心中未遂事件を素材にした『煤煙』は、死に立ち向かい後戻りをしたドストエフスキーの体験を実験しようとした森田の、ある種のレポートであり、明子は要吉にとって「ラスコーリニコフであり、その原理であり、ソーニャであり、又老婆―一口にいってドストエフスキー的世界現出のワキ役である」[12]という清水孝純の『煤煙』の内実に関する考察を念頭において考えてみると、なるほど人間の「高邁な精神や感情といふもの」は非常な事件によってしか見出すことができないという余りにも強調され、傾いた芸術論にとらわれた森田の、作家及び人間としての方向性を案じていた漱石の言葉は、ドストエフスキーよりも森田に対する批判のように見受けられる。それは、師弟間での議論のあとも、漱石は大体森田の持っていたドストエフスキーの本を読破した事実、それから「…and that is the reason for the superiority of Dostoievsky… “Nothing is true, everything is allowed“ is dangerous not less to the rare than is to the common man」[13] や「Dostoievsky ト Maeterlinck」[14]というドストエフスキーに関する大正 4 年秋頃の日記での記述や同年 11 月の日記にみられるドストエフスキーの『白痴』からの 3 つの書き抜き[15]が明示している漱石のドストエフスキーに対する関心と理解によって傍証されている。

周知の通り、漱石が初めてドストエフスキーに言及しているのは、随筆『思ひ出す事な

---

[9] 前掲、125 頁
[10] 前掲、130 頁。
[11] 前掲、119 頁。
[12] 清水孝純（1968/3）「草平・漱石におけるドストエフスキーの受容」『大正文学の比較文学的研究』明治書院、29 頁。
[13] 夏目漱石（1936）『漱石全集第 14 巻』漱石全集刊行會、808 頁。
[14] 前掲、810 頁。
[15] 前掲、814-821 頁。

ど』(明治 43 年 10 月 29 日から朝日新聞に連載) の「二十」及び「二十一」の中であるが、その時点ではすでに漱石のドストエフスキーに対する極めて肯定的な見解が見受けられる。明治 43 年 6 月から胃潰瘍で東京・内幸町の長与胃腸病院に入院していた漱石は同年 8 月、退院し門弟の松根東洋城の勧めで転地療養のために伊豆・修善寺の温泉へ赴く。しかし修善寺温泉の菊屋旅館で、病状が悪化する。大量に吐血し、人事不省に陥って 30 分間の臨死体験をする。生死の境をさまよった漱石は命を取り留めて 10 月 11 日に帰京し、同年 10 月末、随筆『思ひ出す事など』に着手する。明治 44 年 1 月 5 日に連載された『思ひ出す事など』「二十」では、「ツルゲニエフ以上の藝術家として、有力なる方面の尊敬を新たにしつつあるドストエフスキーには、人の知る如く、小供の時分から癲癇の発作があつた」[16]という切り口で、自身の大吐血の後に訪れた「尋常を超え」た精神状態をドストエフスキーの癲癇の発作直前の快感と比較しつつ語っており、さらに 1 月 10 日に連載された「二十一」では、30 分間の死を体験して「此死此生に伴ふ恐ろしさと嬉しさが紙の裏表の如く重なつたため、余は連想上常にドストイェフスキーを思い出したの[17]」であり、「運命の擒縦を感ずる點において、ドストイエフスキーと余とは、殆ど詩と散文ほどの相違がある」といいながらも、「ドストイエフスキーは自己の幸福に対して、生涯感謝する事を忘れぬ人であつた」[18]とドストエフスキーに対して深い理解を示している。

ここまでみてきたように、森田の前ではドストエフスキーの小説を酷評したものの、漱石は終始ドストエフスキーに対して肯定的であったと考えられる。しかし創作のレベルにおいてドストエフスキーの影がみられるだろうか。漱石におけるドストエフスキーの受容というのは、古くから注目されてきた問題である。たとえば、板垣直子は、『漱石文学の背景』(1956) のなかで、漱石がドストエフスキーの『罪と罰』と『白痴』に示唆を受け、『道草』にドストエフスキーの影響がみられると論じている[19]。宮井一郎は、『漱石の世界』(1967) において『彼岸過迄』や『行人』における「技法的な誇張」にドストエフスキーの『罪と罰』の影響を見出している[20]一方、大久保純一郎は、「漱石とドストエフスキーの小説 三 」『心』(1977/1) のなかで、『彼岸過迄』におけるドストエフスキーの『白痴』の影を指摘している[21]。が、前述したように、漱石が『白痴』を初め、「三四冊を読破」したのは、大正 2 年 7 月以降であり、「大体私[森田:引用者注]) の持ってゐた本で、一通り

---

[16] 夏目漱石 (1936) 『漱石全集第 10 巻』漱石全集刊行會、395 頁。
[17] 前掲、400 頁。
[18] 夏目漱石 (1936) 『漱石全集第 10 巻』、 395-401 頁。
[19] 板垣直子 (1956) 『漱石文学の背景』鱒書房、190-194 頁。
[20] 宮井一郎 (1967) 『漱石の世界』講談社、122-123 頁。
[21] 大久保純一郎 (1977/1) 「漱石とドストエフスキーの小説 3 」『心』第 30 巻 第 1 号、81 頁。

は讀み盡された」[22]、「先生のことだから、一人の作家を讀みかけると、それをエキソースチブに悉く讀んでしまふといふ風であった」[23]といった森田草平の証言、ドストエフスキーに関する漱石の日記・断片での記述や森田草平宛の書簡が最も多くみられる時期を踏まえると、おそらく漱石の積極的な関心がピークに達したと考えられるのは、大正 4 年の秋から大正 5 年にかけてのことであったと思われる。漱石文庫にみられる、ロシア文学関係の 3 冊の著書のうち、漱石が明治 43 年 10 月に読んだ『ロシア文学の道標』では、ベアリングは『貧しき人びと』、『罪と罰』、『死の家の記録』、『白痴』、『悪霊』、『カラマーゾフの兄弟』について最も詳しく考察している。が、随所にちりばめられている引用が何かしらの示唆を漱石に与えたと考えられるとはいえ、大正 4 年 11 月以前に書かれた創作において漱石がドストエフスキーの作品そのものを読まずにドストエフスキー的な技法を取り入れたとは考え難い。

ゆえに、本稿では『こころ』にみられる『白痴』との近似性を漱石におけるドストエフスキー受容というよりは、両作家にみられる批判意識の共通性という観点から考察することを試みる。

2. ドストエフスキーと漱石における近代西欧文明と自国への眼差し

ドストエフスキーは 1862 年 7 月から 9 月にかけて初めてロンドン、パリ、ベルリンなどを旅行するが、当時のヨーロッパ文明の正体やそれがロシアに及ぼす影響についての彼の観察は『冬に記す夏の印象』（1863 年 2 月から 3 月にかけて雑誌『時代』に掲載）という旅行記に綴られている。「長いことあこがれ期待した」ヨーロッパへの初旅であったが、ドストエフスキーはようやく訪れたヨーロッパの文明に対してことごとく反発を覚える。

彼がロンドンで見出したのは、西欧文明の最先端を象徴する広大な景色ではなく、「半裸の、飢えた、無気味な住民の擁している、たとえばホワイトチャペルのような、都会の恐ろしい片隅」や「麻痺状態におちい」っている労働者の姿であり、「陰気くさい傲慢な精神」、「大衆の貧困、困苦、不平、衆愚化に決して心をわずらわされるようなことは」ない、バアルの神の支配である。彼はロンドンの「無言のままひしめき合っている」人々の姿に、「目の前で成就されつつある黙示録」的な、「バビロンを思わせる」[24]ようなものさえ感じ取っており、「友情の世界を創り出すことはできない」、「己れ自身の自我による自己決定の精神」[25]である西欧の個人主義を鋭く批判している。

---

[22] 森田草平（1948）『夏目先生と私 下』、441 頁。
[23] 前掲、431 頁。
[24] ドストエフスキー、小泉猛［ほか］訳（1978）『ドストエフスキー全集 6』新潮社、41-48 頁。
[25] 前掲、54-57 頁。

そしてその約 40 年後、明治 33（1900）年 9 月に漱石は日本政府から留学生としてロンドンに派遣され、そこに 2 年滞在することになるが、「倫敦消息」（明治 34 年 5 月～6 月、「ホトトギス」第 4 巻第 8 号及び第 9 号）において、イギリス人については「大抵の人間は非常に忙しい。頭の中が金のことで充満しているから日本人などを冷やかしている暇がない」[26]と書いており、さらに中根重一宛ての手紙に以下のようなイギリスにおける貧富の差に対する彼の観察がみられる。

> 欧州今日文明の失敗は明らかに貧富の懸隔甚だしきに基因致候。この不平均は幾多有為の人材を年々餓死せしめ凍死せしめもしくは無教育に終らしめ、かえって平凡なる金持をして愚なる主張を実行せしめる傾なくやと存候。[27]

また、『断片』においても漱石の英国文明への批判が長々と書かれているのである。

> 明治三十八・九年
> Self-conscious の age は individualism を生ず。社会主義を生ず、levelling tendency を生ず。［中略］ Self-consciousness の結果は神経衰弱を生ず。神経衰弱は二十世紀の共有病なり。人智、学問、百般の物事の進歩すると同時にこの進歩を来したる人間は一歩一歩と頽廃し、衰弱す。［中略］父子の関係を疎にし、師弟の情誼を薄くし、夫婦の間を割き、朋友の好みを減する傾向なり。昔人の如き関係にては到底今日の程度の神経にて堪へ得べからざるが故なり。［中略］他日もし神経衰弱のために滅亡する国あらば英国は正に第一にをるべし。［中略］愚なる日本人はこの病的なる英人を学んで自ら病的なるを知らず。好んで自殺を遂ぐるにひとし。[28]

そのような漱石の西欧文明観について、高橋誠一郎は、「ロンドンに西欧文明の繁栄を見た福沢諭吉よりも、むしろ西欧文明の影の悲惨さを見て、貧民窮での買春婦や「事実に圧しひしがれ」「麻痺状態」におちいっている労働者たちの姿を描き出したロシア人作家ドストエフスキーの観察に近いのである」[29]と述べている。ここで見逃せないのは、ドストエフスキーと漱石におけるこういった批判意識はまた、自国にも向けられていたことである。

---

[26] 三好行雄編（2015）『漱石文明論文集』岩波書店、282 頁。
[27] 夏目漱石（1936）『漱石全集 第 16 巻』漱石全集刊行會、170 頁。
[28] 三好行雄編（2015）『漱石文明論文集』、311-312 頁。
[29] 高橋誠一郎（2002）『欧化と国粋―日露の「文明開化」とドストエフスキー』刀水書房、183-184 頁。

1861 年 2 月 19 日、貴族の所有する土地に緊縛されていた農奴が、ロシアの近代化を徹底しようとしていたアレクサンドル 2 世の農奴解放令によって自由となった。しかし土地を与えられず、唯一の生活手段を失った農民は、仕事を求めて都市に流入するものの、そこでも貧困に苦しんでおり、ペテルブルグなどでは盗み、殺し、放火事件が増加するのである。農奴解放は、ドストエフスキーが長いこと待ち望んでいたことであったが、その初期段階では農民の置かれている状況を本質的に改善するよりは、むしろ新たな経済的不安と社会的混沌をもたらすこととなった。ドストエフスキーはのちに「作家の日記」[30]において以下のように書いている。

> [農奴解放:引用者注]以前の世界、以前の秩序（それはきわめて粗悪なものではあるが、なんといっても秩序には相違なかった）は跡形もなく消えてしまった。そして、不思議なことには、以前の秩序の暗澹たる精神的方面、すなわちエゴイズム、シニズム、奴隷根性、分裂、売節などは、奴隷制度の撤廃とともに消滅しなかったのみならず、むしろいっそう強化し、発達し、増大したかのように思われる。しかるに、古い生活の道徳的方面にも、とにかく良いものがあったにもかかわらず、それはほとんどなに一つ残っていない。[31]

> しかし、今の恐ろしい時代において、人間を堕落させるために猛威を逞しゅうしているのは、はたして酒のみだろうか？ まるでなにか人を酔いしれさしてしまうようなものが、堕落の黴菌とでもいうべきものが、空中に瀰漫しているような具合である。民間には、随所に蔓延した物質主義の崇拝といっしょになって、今までためしもないような思想の堕落が始まった。この場合、わたしが物質主義と呼ぶのは、人民の拝金的傾向、金嚢の力に対する盲拝をさすのである。今日の時代では、この金嚢がすべてである、この中には、あらゆる権力を含んでいる、今まで親がいったり教えたりしたことは、みんな寝言にすぎない、―こういう思想がとつぜん人民の頭へどっと流れ込んだように見える。[32]

ドストエフスキーは、大変動の時代におけるロシアの一般民衆の苦悩と精神的な動揺を彼らの霊的堕落の原因とみており、領主から解放された農民は、今回は功利主義の奴隷と

---

[30]『作家の日記』は、ドストエフスキーが 1873 年から晩年にかけて断続的に発表した、主にドストエフスキーの政治論や社会評論、短編小説などからなる雑誌である。

[31] ドストエフスキー、米川正夫訳（1970）『ドストエーフスキイ全集 14』河出書房新社、117 頁。

[32] 前掲、200 頁。

なったという新たな悲劇を嘆いているのである。漱石もドストエフスキーと同様に、西洋に直接ふれることによって自分自身や自国のアイデンティティを再認識し、さらに物質的・経済的な豊かさを中心とした西欧文明に対してだけでなく、やむをえずそういった西欧を理想とした近代化に走った自国の現状に対しても批判的な眼差しを向けるに至る。たとえば、明治 34（1901）年 4 月以降の「断片」において、「日本人は創造力を欠ける國民なり維新前の日本人はひたすら支那を模倣して喜びたり維新後の日本人は又専一に西洋を模擬せんとするなり憐れなる日本人は専一に西洋人を模擬せんとして經濟の點に於て便利の點に於て又発作後に起こる過去を慕うの念に於て遂に悉く西洋化する能わざるを知りぬ」[33]と書き付けている。また、日本の近代化に対する漱石の理解が最も明瞭に現れているのは、明治 44 年 8 月、岡山で行われた、「現代日本の開化」という講演においてであろう。「現代日本の開化」のなかで、漱石は 100 年をかけてなされた西洋の「内発的」な進歩に対して、日本の開化を「外からおっかぶさっ」た「外発的」で「不自然」なものであり、「やむをえない、涙を呑んで上滑りに滑って行かなければならない」ようなものであるとし、その心理的な影響にふれて「こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を懐かなければなりません。それはあたかもこの開化が内発的でもあるかの如き顔をして得意でいる人のあるのは宜しくない。それはよほどハイカラです、宜しくない。虚偽でもある。軽薄でもある」[34]という。

いうまでもなく、ドストエフスキーと漱石のこういった批判意識は創作のレベルにおいても現れている。次節では、両作家が抱いていた近代文明に対する問題意識はどのように『白痴』と『こころ』において反映されているかを論じたい。

3.『白痴』と『こころ』—金銭力と恋愛のドラマ

3.1.『白痴』における金と権力

『白痴』の主要な登場人物は、男ではムイシキン（26 歳）とロゴージン（27 歳）、女ではナスターシャ（25 歳）とアグラーヤ（20 歳）である。癲癇の持病持ちのムイシキンは、治療を受けていたスイスからロシアに帰国し、ロゴージン、エパンチン一家、ガーニャ、そしてナスターシャに出会い、ナスターシャとナスターシャの最も情熱的な求愛者であるロゴージンと三角関係に巻き込まれてしまう。そして、その三角関係にナスターシャを「恋

[33] 三好行雄編（2015）『夏目漱石文明論文集』岩波書店、310 頁。
[34] 前掲、33-34 頁。

で愛しているのじゃなくて、憐憫で愛している」[35]のに対して、ムイシキンが恋愛感情を持っているエパンチン家の三女アグラーヤが加わり、4 人の複雑な関係を軸にストーリーが展開していく。ムイシキンとナスターシャの関係を確かめようとしたアグラーヤに呼び寄せられて、彼女にひどく侮辱され、自尊心を傷つけられたナスターシャは、ついに自分とアグラーヤとの間で選ぶようにムイシキンを挑発してしまう。しかし二者択一を迫られたムイシキンは、ドストエフスキーの理想としたキリスト教的な愛によって動かされているため、恋を選ぶわけにはいかなかった。なぜなら、彼の中では同情は恋よりも上位であったからである。それは、『白痴』創作ノートにみられる「同情はキリスト教のぜんぶ」[36]というドストエフスキーの記述からも裏付けられる。このように、ムイシキンは、創作ノート通り自分だけでなく、自分を愛しているアグラーヤまで犠牲にして、その理想的な愛を実践した。やがてナスターシャはロゴージンに殺され、ムイシキンは元の白痴状態に戻り、ふたたびスイスに治療に行くことになる。

『白痴』における人間関係のマトリックスを考えるうえで、まずは 4 人の運命を大きく左右するナスターシャの個人的な悲劇を理解しなければならない。7 歳のときに孤児となったところを貴族トーツキーに引き取られ、16 歳になってから 4 年の間彼の囲い者であったナスターシャは、5 年ほど前に、トーツキーがとある家柄のいい美人との結婚を企てている噂を聞いて、ペテルブルグのトーツキーのもとへおしかけ、長い間抱いていた彼に対する「もうまったく常軌を免してしまった、何ものをもっても癒すことのできない侮辱の念」[37]をぶちまけてみせる。幼いころにトーツキーに純潔を奪われたナスターシャは、「心臓のかわりに石が横たわっており、感情はひあがって永久に枯死して」しまった、「凌辱されたファンタスチックな女」[38]に変身している。

第一編において、ナスターシャとの接し方に戸惑っているトーツキーは、彼女に 7 万 5 千ルーブリの持参金を付けて強欲な青年ガーニャと結婚させようとするが、言ってみればトーツキーにとってナスターシャは〈売買品〉に過ぎない。7 万 5 千ルーブリを手に入れたいため彼女と結婚しようとしているガーニャに向って、「こんな男は金のためなら人殺しでもします。ごらんなさい、今どきの人はみんな欲に渇いて、金に心を奪われ、まるでばかみたいになってしまってるじゃありませんか」[39]というナスターシャは自分の婚約者のガーニャを初め、金銭欲・物欲が凄まじい当時の社会の闇を暴き出す。そしてナスターシャに選ばれるために 10 万ルーブリを血眼になって集めたロゴージンは彼女の 25 歳の

---

[35] ドストエフスキー、米川正夫訳（1969）『ドストエーフスキイ全集 7』河出書房新社、218 頁。
[36] ドストエフスキー、米川正夫訳（1969）『ドストエーフスキイ全集 8』河出書房新社、305 頁。
[37] ドストエフスキー、米川正夫訳（1969）『ドストエーフスキイ全集 7』、45 頁。
[38] 前掲、47 頁。
[39] 前掲、173 頁。

誕生会に乗り込む。言いかえれば、ロゴージンは単にナスターシャの値段を競り上げ、彼女を買取しようとしていたのである。そこで、このような取り引きの対象になっているナスターシャに強い同情を覚えたムイシキンは結婚を申し出る。「この結婚によってぼくがあなたに対してではなく、あなたがぼくに光栄を与えてくださるのです。ぼくはなんの価値のない男です。が、あなたは艱難辛苦してこの地獄の中から清い人間として出て来られました。これだけでたくさんです。それなのに、あなたは何を恥ずかしがって、ラゴージン[40]といっしょに行こうなどとお考えなさるんでしょう？ 」[41]　世間から、ナスターシャは誇り高く、大胆で気まぐれな美人というラベルを貼られているが、唯一ムイシキンは彼女の防衛機制としての傲慢さに潜んでいる、侮辱された、純粋無垢な子供のような心を見据えている。「すばらしい顔ですよ！［中略］この人の運命はなみはずれたものだと僕が信じますね。顔はなんだか楽しそうに見えますが、じっさいは非常に苦労したんでしょう」[42]とナスターシャの肖像画を目にしたムイシキンはいう。しかし幼い頃にトーツキーに玩弄物扱いにされたナスターシャのプライドと表裏にある堕落した、不潔な女性としての自己認識と自尊心の欠如は、彼女を自己破滅の道へと進ませる。「あなたには誇りがあります、ナスターシャさん、けれどもあなたは不幸のあまり、じっさい、自分が悪いと思っていらっしゃるかもしれません。あなたは、よほど親切に介抱する人がなくちゃなりません、ナスターシャさん、ぼくがその介抱します」[43]というムイシキンが差し伸べた手を払いのけ、ロゴージン一行とその場を去っていく。

米川正夫は、「『白痴』の中で提出された人間にたいする金の威力という思想は、ラゴージン[44]の中にもっとも明瞭に集中されている」[45]と指摘しているが、私見によれば、権力も金力も悪用して、孤児となった幼いナスターシャを引き取り、その純潔を奪うことで彼女に計り知れない侮辱と苦痛を与えたトーツキーは、金銭の威力を表している人物であり、また『白痴』における悲劇の連鎖の真の原因でもあるということができる。ロゴージンには金があったが、ナスターシャの心を動かすだけの力がなく、彼女をものにするために金力を〈権力〉にかえようとしたのである。ナスターシャとガーニャの婚約の噂を聞いて、恋のライバルを「金で買」おうとするロゴージンの言葉が印象的である。

「ほんとてめえはルーブリ銀貨を三枚ポケットから出して見せたら、それがほしさ

---

[40] 原文ママ
[41] 前掲、176 頁。
[42] ドストエフスキー、米川正夫訳（1969）『ドストエーフスキイ全集 7』、38-39 頁。
[43] 前掲、180 頁。
[44] 原文ママ
[45] 米川正夫（1971）『ドストエーフスキイ全集 別巻 ドストエーフスキイ研究』河出書房新社、303 頁。

にヴァツーリエフスキまで四つばいになって行かあ―てめえはそれくらいのやつよ！　てめえの根性骨はそれくらいのものよ！ おれは今もてめえをすっかり金で買いに来たんだぜ。［中略］何もかもありったけ買ってみせらあ！」[46]（傍点引用者）

また、ナスターシャの心を掴むためにも、ロゴージンは何よりも金の力に頼っている。第一編においてナスターシャを 10 万ルーブリで買収しようとしたことや、第二編においてムイシキンとの会話のなかで、「あれはおれを人間の中のくずみてえに思ってやがる。［中略］それに金、金をどれだけつぎこんだか……」[47]（傍点引用者）とモスクワでナスターシャから受けた侮辱を語りながら金を話題にするロゴージンの言語行動からうかがうことができる。

一方、「腹黒で欲っぱり」で、「何ものもつり合いのとれぬほど自尊心が強い」[48]ガーニャは金も権力も持っておらず、それらを手に入れようと、トーツキーとエパンチン将軍が持ち出した結婚談を承諾してしまう。しかし、トーツキーとエパンチン将軍にとってガーニャもナスターシャと同じように、ただの〈商品〉にすぎない―「ふたりの親友が、［中略」 ナスターシャを正妻に売りつける手段でガーニャを買収しようと」[49]（傍点引用者）したのであった。

『白痴』において金銭欲・物欲が蔓延する当時の社会における人間関係を最も的確に表現するのは皮肉にも道化のレーベジェフである。ドストエフスキーはレーベジェフの口を借りて、この時代を「奇態な、落ち着きのない時代」[50]とし、その社会は「なんらの精神的根拠も持たないで、ただ個人の利己心と物質的必要ばかり満足させようとする」[51]、「自己保存の原則と自己破滅の原則は、人類に在って同じように強い力を持っております！悪魔が神と同様な力で人類を支配しております」[52]と主張した。

3.2. 『こころ』における金力と精神力との衝突

漱石の『こころ』においても、人間関係は金によって大きく左右されるのである。「相当の財産が」[53]ある家に生まれた先生は、まだ「二十歳にならない時分」、両親を亡くし、

---

[46] 前掲、121 頁。
[47] 前掲、220 頁。
[48] 前掲、51 頁。
[49] 前掲、52 頁。
[50] ドストエフスキー、米川正夫訳（1969）『ドストエーフスキイ全集 8』、33 頁。
[51] ドストエフスキー、米川正夫訳（1969）『ドストエーフスキイ全集 7』、394 頁。
[52] 前掲、395 頁。
[53] 夏目漱石（2013）『こころ』新潮文庫、174 頁。

遺産を叔父に預けたが、「ただでさえ誇りになるべき」[54]であった叔父に騙され財産を誤魔化されてしまい、両親を失ったときさえ感じたことのなかった弱さを味わい、人間不信に陥った。友人の助けを借りて残った遺産を受け取った時、先生は自分の自立性を意識し、その印にまず「騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えてみようかという気にな」[55]る。そのようにして、先生は素人下宿を提供している軍人の未亡人「奥さん」とその一人娘「御嬢さん」に出会い、次第に御嬢さんに恋愛感情を持つようになる。しかし、当初御嬢さんに対して抱いている「殆んど信仰に近い愛」[56]に御嬢さんの母親も、過去にお金を当てに従妹との縁談を持ち込んだ叔父叔母と同じような「狡猾な策略家」ではないかという「猜疑心」[57]が影を落とした。何度か奥さんに御嬢さんを嫁にもらう話をしようと決心しては断念するのは、前述のように「誘き寄せられるのが嫌」[58]だからであり、「私は金に対して人類を疑ったけれども、愛に対しては、まだ人類を疑わなかった」[59]といいながらも、先生はここでやはり恋愛より金を選んでしまったのであった。

財産の一部分を横取りされたとはいえ、先生は経済的に厳しい状況にあるKに「物質的な補助」を申し出る余裕があるほど、「金に不自由のない」[60]生活を送っていた。「私より強い決心を有している男」で、「勉強も私の倍位はしたでしょう。その上持って生まれた頭の質が私よりずっと可かったのです。「中略」 私には平生から何をしてもKに及ばない自覚があった位です」[61]と、先生はKに対して精神的な方面や学問の方面において劣等感を感じていたが、それと同時に金銭面においての優勢を自覚していたと考えられる。「剛気」なKは先生からの支援を「大学へ這入った以上、自分一人位どうか出来なければ男でない」[62]と拒否するが、徐々に神経衰弱に罹ってしまい、Kを助けるために先生は彼を同じ下宿に住ませ、その費用を負担することにする。しかしその共同生活は先生にとっておもいがけない試練となる。

先生はKを「溺れかかった人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟」[63]で、奥さんの家へ連れてきて、「温かい面倒」を見てくれるように奥さんにも御嬢さんにも頼んだのであったが、Kと御嬢さんが次第に仲良くなるにつれて、嫉妬心にかられてしまう。御嬢さんがどちらに意があるのかと悩みつつ、奥さんに御嬢さんを貰い受ける話をしようか

---

[54] 前掲、197 頁。
[55] 前掲、193 頁。
[56] 前掲、206 頁。
[57] 前掲、209 頁。
[58] 前掲、213 頁。
[59] 前掲、200-201 頁。
[60] 前掲、193 頁。
[61] 前掲、234 頁。
[62] 前掲、225-226 頁。
[63] 前掲、232 頁。

という思いが、あらためて頭をよぎるが、前のようにいつまで経っても口に出せなかった。今回はその理由が「此方でいくら思っても、向うが内心他の人に愛の眼を注いでるならば、私はそんな女と一所になるのは厭」[64]だからであった。にもかかわらず、Kに御嬢さんへの気持ちを打ち明けられ、助言を求められた先生は、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」というK自身の言葉を武器に「一打で彼を倒」し、ついに奥さんに「御嬢さんを私にください」と申し出る。先生が恐れていたのは、Kが会話の中で口にした「覚悟」の意味すること、そしてそれが「自分の利害と衝突する」ことであった。

Kは真宗の坊さんの息子であり、「常に精進という言葉を使」い、「普通の坊さんよりは遥かに坊さんらしい性格を有って」[65]いた。精神的向上心の高いKは「意志の力を養って強い人になる」[66]ことを志していた。中学の時にKは医者の養家に出されるが、養父母が彼を医者にするつもりで送っている金で、「道のため」に先生と同じ科に入学し、高校 3 年目の夏休みの間に養家に自分の偽りを白状したところで、養家はもちろん、実家からも勘当されてしまう。にもかかわらず、大学に進学し、夜学校の教師をやりながら学問に励んでいたKを、先生は「心のうちに常に［中略］畏敬」[67]していた。先生には、金力はあったが、Kはそれにまさる内なる力を持っていることも承知していた。過去にK自身によって発せられた「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉を友人に投げ返した先生はまさしく「私より強い決心を有している」Kのその精神的な力に向けての攻撃に出た。自分の前に「萎縮して小さくな」[68]ったKの敗北を確かめた先生が、「外の事にかけては何をしても彼に及ばな」いのに、「その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対して」[69]覚えたことからもうかがえる。自分の決めた「道」から踏み外したことを自覚したKは、奥さんに先生と御嬢さんの縁談を聞かされたとき、親友の裏切りを知ることで更なる衝撃を受けるとともに、自分はいかに孤独かを思い知らされ、自決してしまう。「策略で勝っても人間としては負けたのだ」[70]というのが、先生の苦々しい結論である。Kが自殺してから数か月後に御嬢さんと結婚した先生の幸福には常に良心と悲しい運命の予感の「黒い影が随いて」[71]おり、「冷たくなったこの友だちによって暗示された運命の恐ろしさを深く感じ」[72]、「Kの歩いた道を、Kと同じように辿っていること」[73]を予覚した先生はついに

[64] 前掲、263 頁。
[65] 前掲、220-221 頁。
[66] 前掲、230 頁。
[67] 前掲、220 頁。
[68] 前掲、285 頁。
[69] 前掲、288 頁。
[70] 前掲、301 頁。
[71] 前掲、311 頁。
[72] 前掲、305 頁。
[73] 前掲、318 頁。

明治の終焉を迎え、「自由と独立と己れとに充ち」[74]たその精神に殉死するが、やはりすべての引き金となったのは先生の学生時代に表面化した欲望と利己心である。

3.3. ムイシキンとＫ－世俗に染まらなかった２人

『白痴』のレーベジェフは、世界の終末を暗示する「ヨハネの黙示録」にふれ、

> 「人間というものは『第三の活物』［ヨハネの黙示録:引用者注］の黒馬と、その上にのって手に衡を持った人といっしょに暮しているのだ、［中略］なぜってごらんなさい。今の世の中はなんでもかでも衡と談判で持ちきり、人間はただ自分の権利ばかりさがしているじゃありませんか。『銀一ディナールに小麦一升、銀一ディナールに大麦三升なり』でさあ……その上に自由な精神だの、清き真心だの、ありたけの神さまの贈物を大切にしまっておこうというのだから、やりきれませんよ。しかし、権利一点ばりでそんなものがしまえるはずがないから、すぐそのあとから『死』と呼ばれる青ざめた馬がやってくる、そのまたあとから地獄……」[75]

と、物質主義が蔓延するこの時代を批判しているが、それは『こころ』の先生のいうところの「自由と独立と己れとに充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わなくてはならないでしょう」[76]と呼応しており、『白痴』ではトーツキーやロゴージン、『こころ』では先生の叔父や先生自身は明らかにそれぞれ近代化の渦中にあったロシアと日本における功利主義的風潮を象っていることは前述した通りである。一方、ロゴージンと先生それぞれに競争者として認識されていたムイシキンとＫは２人とも、どこか世俗離れしたところがある。ムイシキンは、ドストエフスキーが古くから抱いていた、キリストを理想とした「しんじつ美しい」人間の観念を体現しており、人の苦しみに共感できる能力を備えた、純粋で、誠実な人物である。前述したように、Ｋの方も、真宗寺に生まれ、「普通の坊さんよりは遥かに坊さんらしい性格を有って」おり、哲学や宗教を学び、仏教もさることながら、聖書やコーランにも興味があり、神学者・神秘主義思想家のスウェーデンボルグの名まで口にする。また、ムイシキンがスイスの精神病院に入院している間、その治療費を払っていた彼の恩人であるパヴリーシチェフ以外に、ムイシキンが自分の家族について一切語っていないのと同じように、Ｋもまた母がおらず、父は真宗の

---

[74] 前掲、47 頁。
[75] ドストエフスキー、米川正夫 訳（1969）『ドストエーフスキイ全集 7』、211 頁。
[76] 夏目漱石（2013）『こころ』、47 頁。

坊さんではあったが、「義理堅い点に於て、寧ろ武士に似たところ」があり、Kは中学生のときに医者の家に養子に遣られた。「彼の性格の一面は、たしかに継母に育てられた結果とも見る事が出来るようです」[77]という先生の言葉が暗示しているように、Kはおそらく家族のぬくもりを知らずに育ったと考えられる。

叔父に財産を誤魔化され人間不信に陥ってしまった先生と違って、養家からも実家からも勘当されても、「自分一人位どうか出来なければ男でない」というKは、お金に無頓着であるといってよかろう。養家から学費を貰えなくなったKは、「今まで通り勉強の手をちっとも緩めず」[78]に、夜学校の教師をしながら「独力で己を支えて行った」[79]のである。みすぼらしい風呂敷包みひとつを持って三等列車でロシアに帰国したムイシキンも、決してお金に余裕のあるような人ではないが、それを苦にする様子はまったく見受けられない。ペテルブルグに着いた日にエパンチン将軍からもらったお小遣いを飲んだくれのイヴォルギン将軍に取られても機嫌を損なうこともなく、膨大な遺産を譲り受けたあとも、財産に執着するどころか、会ったこともない、お金を無心してくる人に快くお金を工面したりする。

ロゴージンと先生の存在は、金銭に無頓着なムイシキンとKの世間の俗事に染まらないでいることをよりいっそう浮き彫りにする。また、ムイシキンとKの恋は、相手を独占しようとするロゴージンと先生のそれと違っていた。ムイシキンにとってアグラーヤとの結婚とは、単純に彼女のそばにいることができることを意味していた。Kもムイシキンと同様に、御嬢さんに対してより洗練された、「慾を離れた」[80]恋愛感情を抱いており、先生のように御嬢さんを「専有」したいという衝動と闘うよりは、むしろ、ムイシキンの如く、おもいがけなくおとずれた恋にどう対処すべきかという問題に悩まされていた。そして、ムイシキンの場合は、アグラーヤとナスターシャとの対面の結果、2 人の間のうちどちらかを選ぶように迫られても、性質的に、「恋で愛し」ている相手よりは「憐憫で愛し」ている相手を救うことしかできるはずがなかった。Kにはそういう選択肢すら与えられていなかったが、仮に先生の裏切りを知らされずにいたとしても、そのうちに自分の意志で下宿を出てしまう可能性は極めて高かったのではないか。Kの自殺の原因は先生のいうように、失恋や現実と理想との衝突ではなく、耐えきれない孤独であった。「霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭打ったりした」[81]昔の人を理想とし、精進の道に励んでいる「単純」で、「人格が善良」なKと、「だれよりも潔白」で、「だれよりも高尚」で、「だれ

---

[77] 前掲、227 頁。
[78] 前掲、226 頁。
[79] 前掲、229 頁。
[80] 前掲、283 頁。
[81] 夏目漱石（2013）『こころ』、254 頁。

よりも善良」なムイシキン。貪欲と我執と欲望の渦巻く世俗を離れたこの 2 人は、一番近くにいる人にさえ理解されず、「自分で自分を破滅しつつ進み」、[82] それぞれ悲劇的な最後を迎えることになったのである。

終りに

ここまでみてきたように、ドストエフスキーと漱石はそれぞれ過渡期に生き、創作活動を行っていた。ドストエフスキーと漱石はともに、自らが身をもって体験した近代西欧文明に対する批判意識を持っていたが、それは近代西欧文明の影響をやむを得ず受けながら近代化を進めているそれぞれの自国を考えてのことでもあった。小泉浩二郎は「漱石の『心』の根底」のなかで「漱石の文学的営為は、常に人間における存在的不安の剔抉と現代日本の開化に対する文明批判の精神というふたつの主軸に貫かれているのであるが、その作品の書かれた時点(広い意味)での社会的反映であるということを否定することはできない。漱石は生きた社会的現象への強い関心を持つ作家であった」[83]と指摘しているが、そのような見解はそのままドストエフスキーにも当てはめることができる。

言語学者で比較文学者であるジルムンスキー（1891－1971）は、その著『比較文学―東と西』中の「国際的な現象としての文学的傾向」のなかで、世界文学における主題の類似性にふれ、それは文化的・文学的な影響関係だけではなく、諸民族の社会的発展、文学傾向の共通性によるものでもあると述べ、「比較文学という学問の根本的な前提は、人類の社会的・歴史的な発展の過程において一貫したパターンが存在することにある。そのような共通性はさらに現実認知の形象的な現れとしての芸実・文学における一貫した発展の過程を決定づけるのである」[84]と指摘した。西洋列強の仲間入りをしようと、文明開化に邁進したロシアと日本の近代文学を代表する作家ドストエフスキーと漱石の作品において、このような主題の共通性がみられるというのも、上記のようなジルムンスキーの世界文学理論の裏付けになっているといえよう。近代化の過程において、日本もロシアも西洋の知識と技術を幅広く導入したが、それとともに資本主義のもたらす社会変化も味わざるをえなかった。そして『白痴』と『こころ』では、「信仰に近い」、高潔な愛よりは、むしろ裏切りも罪悪も内包する恋愛が主軸となっており、両作品における悲劇の連鎖は欲望と我執と独占欲によって誘発されている。

---

[82] 前掲、235 頁。

[83] 小泉浩二郎（1991）「漱石の『心』の根底」『漱石作品論集成 第 10 巻』桜楓社、126 頁。初出、『文学・語学』53 号（1969/9）。

[84] *Жирмунский, В.* Сравнительное литературоведение. Восток и запад. Ленинград: Наука, 1979. С.138.

本論では、漱石の『こころ』とドストエフスキーの『白痴』に焦点を当てたが、漱石がドストエフスキーを読んでから手掛けた『明暗』におけるドストエフスキー受容については、まだ検討する余地がある。これは今後の課題としたい。

Criticism of Modern Society in Dostoevsky's and Soseki's Literary Works: A Closer Look at *The Idiot* and *Kokoro*

Maria Chalukova

The abolishment of serfdom in 1861 during Alexander II's reign (1855–1881) marked the beginning of a tangible modernization in Russia based on European models. Likewise, during the Meiji period (1868–1912), Japan underwent rapid modernization from a feudal society to an industrialized nation by adopting the Western political, economic, and social institutions of the time. Fyodor Dostoevsky (1821–1881) and Natsume Soseki (1867–1916), being among the greatest men of letters from Russia and Japan, respectively, display in their works keen psychological insight into the fundamental changes which the modernization process brought about in both Japanese and Russian societies.

This paper addresses the way Dostoevsky's and Soseki's views on the various ills of Russian and Japanese modern societies are reflected in the human affairs presented in Dostoevsky's *The Idiot* (1869) and Soseki's *Kokoro* (1914). I will argue that the similarities, evident in the two works, in terms of the main characters' mentality and the tragic consequences of love, marred by jealousy and egoism, reflect the authors' criticism of the moral decadence in both Russian and Japanese societies, which can be largely attributed to the growing materialism in their respective countries at that time.

key words: criticism of modern society, Fyodor Dostoevsky, Natsume Soseki